

## 園名

御殿山幼稚園

## テーマ

自然



こどもの「すくすく×わくわく」をおうえん

## 設定の理由

本園は、ビルやマンションが多い都市部に位置し、マンションの2階部分に園舎と人工芝の園庭がある。園内、園周辺の自然環境はとてもの少なく、教師は意図的に自然環境を工夫する必要がある。子どもたちは、自然が身近に感じられる環境や、自然物を取り入れた遊びを提案すると、意欲的に関わる姿が見られ、自然との関わりを通して心をわくわく動かしながら、興味・関心を持ち、考えたり、気付いたりして遊びを楽しんでいる。本園の限られた園環境だからこそ、「自然」をテーマに据え、子どもたちが自然に触れる機会、そして自然を取り入れて遊ぶ機会を増やしていくことで、子どもたちの好奇心・探究心を豊かに育んでいくことができるのではないかと考え、このテーマに取り組んだ。

## 対象年齢

4歳児  
5歳児

## 活動スケジュール

- 6月 樋を組み合わせた水路づくり(5歳児)
- 10月 芽が出てくるかな?(4歳児)
- 11月 浮くかな?沈むかな?(5歳児)
- 1月 マイクロスコープとの出会い(4歳児)



## 事例① 芽が出てくるかな？ 4歳児 10月

保育室の「秋の宝物」コーナーには、家庭から持ち寄ったドングリやマツボックリ、クリなどの自然物に加え、これから植えようとしているソラマメの種や球根、そして図鑑が置かれている。「これ、植えたら芽が出てくるかな」「植えてみたい！」という幼児の声を聞き、教師はテープで区分けしてあるプランターを用意した。幼児は自分が植えたい種を選ばず、「ソラマメとアボカド、元気にぬくぬく育ちますように！」「ヒマワリが元気に育ちますように」と種に土をかぶせていく。その様子に気付いた他の幼児も「私も植えたい！」と種を選んでいく。「今度はカボチャの種植えよ」と友達や先生に伝え、「ドングリの部屋はここだよ」と表示を付けたり「どんな芽が出てくるかなあ」とつぶやきながら水をあげていた。毎日、発芽を期待しながら水をあげていたところ、数日後、ソラマメが発芽したことに気づき、「芽が出てきた！」と伝え合ったり、「ドングリは出てこないねえ」と疑問に思ったことをつぶやいたりする姿もあった。

### 環境のデザイン

- ・ドングリなどに加え、秋植えの種や球根等、様々な自然物が置いてある「秋の宝物」コーナー
- ・自然物は見えやすいように透明な入れ物に種類ごとに分けて置いておく
- ・見たり調べたりできる図鑑
- ・テープで区分けされた自由に植えてもよいプランター
- ・何を植えたかが分かる表示や水やり用のジョウロ

### わくわくしていた幼児の姿

- ・「何の種？」と図鑑で調べたり写真と見比べたりすること
- ・自分で種を選び、発芽を期待しながら繰り返し植えてみる
- ・芽が出てくることを期待して水をあげること
- ・期待感や予想などを友達や教師と共有すること



### 振り返りをふまえた気づき

- ・家庭を巻き込みながら様々な自然物を「秋の宝物」として置いておいたことが、幼児が種実に興味・関心をもつ姿につながった。
- ・「(種を)植えてみたい」という幼児の「やりたい」が実現する環境が整っていたことで、子どもたちはわくわくと心を動かし、自分で植えたい種を選び、繰り返し植える姿につながった。
- ・先が分からないからこそ、わくわくと期待感をもって予測し、想像する楽しさがある。また、表示を付けたことで、自分の植えた種に愛着が生まれ、水をあげたり、期待感をもって毎日芽が出ていないかを確認したりする姿につながった。
- ・「発芽するもの」と「しないもの」があったことで、幼児は不思議さを感じ、比較し、考える姿につながった。発芽しやすいソラマメを意図的に用意するなど、探究の芽を育む環境の工夫が大切である。

## 事例② 浮くかな、沈むかな？ 5歳児 11月

葉を拾った幼児が「これは舟の形をしているから水に浮くに違いない」と考えたことをきっかけに、「これは浮くかな？沈むかな？」という問いが生まれた。A児は「土の中の物は浮かない、木の上の物は浮く」と言いながら、たらいの水にドングリや種を入れ、どうなるかを試している。柿の種を入れたとき、木の上の物なのに浮かないという結果に驚いた表情をし、自然物コーナーにある他の種実を次々に水に入れて「これは浮く」「これは浮かない」と試す。教師が掲示ボードを用意すると、「浮く」「沈む」の表示を作り、実験の結果を貼っていた。B児は、繰り返し試すうちに、同じドングリでも「浮く」ものと「沈む」ものがあることに気が付いた。B児は「何でだろう。カラカラするのとしらないのがあるから浮くと浮かないがあるんじゃない？」とつぶやき、そのことを教師に伝える。教師が「それなら割ってみようか？」と提案し、割ると、沈んだドングリは中身が殻から取れないほど大きかった。A児が「殻から取れないパンパンドングリだ！」と言い、次にカラカラドングリを剥いてみる。そして、「パンパンドングリは重いから沈む」「カラカラドングリは浮く！ここは空気!？」と、発見に驚き、自分の気づきを友達や先生に伝えていた。

### 環境のデザイン

- ・種類ごとに整理して置かれた様々な種実類(ドングリ、マツボックリ、ギンナン、アズキ等)や落ち葉等の自然物
- ・浮く、沈むがすぐに、また繰り返し試せる場
- ・友達と少人数で試すことができる大きさのたらい
- ・試した結果(浮く、沈む)を分類・掲示できるホワイトボード



### 振り返りをふまえた気づき

- ・自分の予想に反したことが起こったことで、幼児の中に「なんでだろう、これはどうだろう」という気持ちが芽生え、繰り返し試す姿につながっていた。分からないことを分かりたいという好奇心や探究心を受け止め、一緒に考えたり、共感したりする姿勢が大切である。
- ・幼児のつぶやきや小さな発見に気づき、次の活動につながる言葉掛け(「割ってみようか」)をすることが大切であり、幼児の学びや気づきにつながる言葉掛けを意識する。
- ・仮に透明で深い水槽を目の高さに置いて試すと、沈み方の違いにも気づく可能性がある。教師が意図して、幼児の気づきが生まれる環境を作ることが大切である。

### わくわくしていた幼児の姿

- ・自分なりの仮説を立てて、試すこと
- ・「何でだろう?」「不思議」と思うことを繰り返し追求していくこと
- ・分からなかったことが分かる喜びや、発見や気づきを友達や教師に伝えて共有したり、共感したりすること